

富山県の小学校教育における

これからのキャリア教育の展開に関する一考察

A Study of Expansion of Career Education
in the Elementary School in Toyama Prefect from now on

辻 井 満 雄 氷 見 卓 也 村 田 夏 樹
TSUJII Mitsuo HIMI Takuya MURATA Natsuki
宮 腰 真 央 石 垣 孝 太 井 上 真 孝
MIYAKOSHI Masao ISHIGAKI Kouta INOUE Masataka

富山県内の小学校に、キャリア教育の推進やキャリア・パスポートへの意識等についてのアンケート調査を行い、キャリア教育に関する現状が明らかとなった。一方、他県のキャリア教育の推進事例に目を向けたところ、学校運営を行う上で、キャリア教育を大きな柱としていることが分かった。児童が「もっと学びたい」「もっとよくなりたい」といった学びに向かう意欲を高めていくことがキャリア教育であり、そのために教師が研鑽を積み重ねていくことが大事だと分かった。各教師の意識改革や日々の教育活動そのものが、キャリア教育の推進に繋がっていくと考える。教師自身が視野を広げ、児童の未来も展望した教育活動の展開が、今後の富山県のキャリア教育の発展や、児童が未来で活躍する上での能力の発現に繋がると考える。今後も、小学校段階におけるキャリア教育の展開について、研究を継続していく必要を感じた。

キーワード： キャリア教育 キャリア・パスポート 小学校

1 はじめに

未来が不透明な現代であっても、児童には自己の長所を十分に生かし、職業を選択・発見・開発し、やりがいをもって働くことができる大人になってほしいと切に願う。そして、そのような大人を生み出す土壌は、家庭教育であり、学校教育であり、そのような大人を育てることが各地域、ひいては我が国の文化・経済等の活性化に繋がると考える。特に、児童一人一人に自分自身のよさを最大限に生かしていこうとする気持ちや未来への希望を育てることが、学校教育全般を通しての責務であり、全教育活動の中でもキャリア教育が果たすべき役割は大きいと考える。

平成11年12月、中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続と改善について」において、「キャリア教育」の必要性が強く提唱された。「キャリア教育を小学校段階から発達

段階に応じて実施する必要がある」とし、「キャリア教育の実施に当たっては家庭・地域と連携し、体験的な学習を重視するとともに、各学校毎に目的を設定し、教育課程に位置付けて計画的に行う必要がある」と提言している。それを受けて、文部科学省は報告書・手引書・パンフレット等を作成してきた。

しかし、多くの小学校の現場では必要性を感じてはいるが、計画的に行われていないのが現状であった。そこで文部科学省は、小学校・中学校・高等学校を連結した形で児童・生徒のキャリア形成を促すため、ポートフォリオ形式の「キャリア・パスポート」の開発を進めた。令和2年度の新学習指導要領の完全実施の準備と並行し、平成29年度より3回に渡って調査研究協力者会議を行い、その具体的趣旨や指導への生かし方を記している。

キャリア・パスポートを令和2年度から実施とはいうものの、いかなるものであり、どのように扱うのかということを知っている小学校は富山県には少ないのではないかと考える。また、キャリア教育自体に対する認識も曖昧なものとなっている可能性がある。

そこで本研究では、富山県におけるキャリア教育やキャリア・パスポートに関する意識を調査する。また、キャリア教育に先進的に取り組む他府県、富山県内の小学校のキャリア教育の事例を取り上げ、今後の小学校段階におけるキャリア教育の展開の在り様について考察していく。

2 キャリア・パスポートとは

(1) キャリア・パスポート導入の背景と目的

平成28年12月に中央教育審議会は「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について(答申)」を取りまとめた。その中の特別活動ワーキンググループにおいては、キャリア教育の中核的な指導場面として特別活動が大きな役割を果たすべきとの議論がなされた。その中で、「キャリア教育は、ややもすると就業体験や進路指導といった狭いものとして捉えられがちであるが、本来、自らのキャリア形成のために必要な様々な汎用的能力を育てていくものであり、学校の教育活動全体を通して行うものである」と確認され、「小学校から高等学校までの特別活動をはじめとしたキャリア教育に関わる活動について、学びのプロセスを記述し振り返ることができるポートフォリオ的な教材(『キャリア・パスポート』)を作成し、活用することが効果的ではないか」との議論がなされた。そして、キャリア・パスポートの活用により、特別活動を中心としつつ各教科等と往還しながら学びを蓄積することで、その学びを社会や将来に繋いで必要に応じて振り返ることが可能となる。このような取組により、児童の主体的に学びに向かう力を育て、自己のキャリア形成に生かすことができるのではないかと提案された。

この提案を受け、文部科学省は平成31年3月29日に「『キャリア・パスポート』例示等資料」を示し、その中でキャリア・パスポートの目的と定義が記された。

以下に、示されたキャリア・パスポートの目的と定義を記す。

<キャリア・パスポートの目的>

小学校から高等学校を通じて、児童生徒にとっては、自らの学習状況やキャリア形成を

見通したり、振り返ったりして、自己評価を行うとともに、主体的に学びに向かう力を育み、自己実現につなぐもの。

教師にとっては、その記述をもとに対話的にかかわることによって、児童生徒の成長を促し、系統的な指導に資するもの。

<キャリア・パスポートの定義>

「キャリア・パスポート」とは、児童生徒が、小学校から高等学校までのキャリア教育に関わる諸活動について、特別活動の学級活動及びホームルーム活動を中心として、各教科等と往還し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったりしながら、自身の変容や成長を自己評価できるよう工夫されたポートフォリオのことである。

なお、その記述や自己評価の指導に当たっては、教師が対話的に関わり、児童生徒一人一人の目標修正などの改善を支援し、個性を伸ばす指導へとつなげながら、学校、家庭及び地域における学びを自己のキャリア形成に生かそうとする態度を養うよう努めなければならない。

キャリア・パスポートの様式は、あくまで例示として各地域や学校の実態に応じ、学校間で連携しながら柔軟な工夫をすることとして示された。

このように、キャリア・パスポートは、自らの成長を振り返って記入・蓄積していくことを通し、主体的な学びに向かう力を育み、自己実現に繋ぐものとして期待されている。

また、キャリア・パスポートを活用する際には、教師が対話的に児童・生徒に関わることに重視されている。さらには、小学校1年生から高等学校3年生までの12年間の記録を綴って残すものとされ、令和2年度からキャリア・パスポートを各学校において実施するものとされた。

(2) キャリア・パスポートの内容

例示されたキャリア・パスポートの内容では、従来の学校教育活動の中で行われてきた各学年進級時の目当てや学年修了時での振り返り、行事等での振り返りが多く見られる。

一方で、以下のような従来の教育活動で行われてきた児童・生徒の自己評価とは異なる側面も見受けられる。

ア 基礎的・汎用的能力との関連

例示されたキャリア・パスポートでは、各学年段階で意識してほしいこととして「基礎的・汎用的能力」の「人間関係形成・社会形成能力」、「自己理解・自己管理能力」、「課題対応能力」、「キャリアプランニング能力」の4つに関わる内容で示され、各学期や学年末の振り返りでも、この観点で振り返るよう例示されている。

イ 教師や保護者のフィードバック

児童・生徒が書いた内容に関し、教師や保護者が児童・生徒の思いに寄り添ったコメントを残すことが示されている。そうすることで、自己肯定感を高めることに繋がる。

また、保護者にコメントを書いてもらう意義を説明することや、個人懇談で活用すること等も例示されている。

ウ 9年間に渡る自己評価の蓄積

1年間を区切りとする振り返りだけでなく、これまでの6年間の小学校生活を振り返って中学校に向けた決意を記し、さらに、3年間の中学校生活を振り返り、高等学校に向けた決意を記すような例示がなされている。自己を捉える振り返りを、ポートフォリオとして小学校、中学校、高等学校と引き継いでいく中で、自己評価を中心とし、教師や保護者からのコメントを参考にしながら、自分の成長を実感して次へ進む道を考えていくといった内容となっている。

このように、例示されたキャリア・パスポートには、従来の各学年で記す目当てや振り返り等を単に綴っていくものとは異なる内容も見えてくる。

キャリア・パスポート導入に、係る理念を理解し、児童・生徒にとって意味のあるものとなるように取り組むことが求められよう。

(3) 富山県キャリア教育資料「キャリア・パスポートのすすめ」と他地域の動向

平成31年3月29日の文部科学省初等中等教育局児童生徒課からの『「キャリア・パスポート」例示資料等について』を受け、富山県においては、令和元年6月にキャリア教育資料作成委員会を設置して会議を重ね、同11月に「キャリア・パスポート」に蓄積する例示シートが示された。

そこでの資料作成に当たっては、次期学習指導要領の趣旨やキャリア教育に係る富山県の児童・生徒の実態を踏まえ、以下の2点を考慮して作成された。

- | |
|---|
| ① 児童・生徒が、なりたい自分に向かって、学ぶことと自己の将来との繋がりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身につける。 |
| ② 児童生徒が、富山を心のふるさととして実感するとともに、一層地域との関わりを深める。 |

富山県においても、文部科学省の例示資料を受けて協議を重ね、県独自の例示資料を作成・用意した。

一方、実際の学校現場では、キャリア・パスポートの理念を理解し、効果を挙げるための準備は果たしてどれほど進んでいるのであろうか。

全国的にキャリア・パスポートが導入されるに至った背景には、既にキャリア・パスポートに類似した取組を行い、大きな教育効果を挙げている市町村や学校の存在がある。例えば国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター（平成30年5月）が示す「キャリア・パスポートって何だろう？」には、キャリア・パスポートの先進的な取組として、北海道「小中高一貫ふるさとキャリア教育推進事業」より「キャリアノート」の取組、秋田県大館市の「秋田わか杉キャリアノート」や「大館ふるさとキャリア教育」の取組、東京都世田谷区立

尾山台小学校の「キャリアパスポート」の取組等が示されている。これらの市町村や学校の取組では、キャリア・パスポートを効果的に活用しながら、キャリア教育を柱に据えた教育活動を展開することで、児童・生徒の自律的な成長へとうまく繋げることに成功した事例が示されている。

3 富山県の小学校におけるキャリア教育やキャリア・パスポートに関する調査

(1) 目的

令和2年度から新学習指導要領の全面実施となり、小学校でのキャリア教育のさらなる充実が求められるとともに、キャリア・パスポートが導入される。そのような状況において、現時点での富山県小学校のキャリア教育への取組の実態やキャリア教育への教職員の意識・課題と感じていること等を明らかにすることで、今後の富山県小学校のキャリア教育のさらなる充実につなげられる示唆が得られるのではないかと考えた。

(2) 方法

ア 調査対象・時期

調査は、富山県内の小学校183校を対象に、令和元年12月10日から令和2年1月17日にかけて、質問紙を郵送または市町村教育委員会の担当箱に投函し、郵送にて回収した。

イ 調査内容

「キャリア教育に関する校内組織やキャリア教育計画の作成の有無等の組織や計画」、「キャリア教育に対する教職員の理解度や意識度」、「キャリア教育に関する研修やキャリア・パスポートの導入に当たっての準備」について、選択肢より回答を求めた。

また、各学年の取組の中で、「特別活動(3)の内容に関連した内容、キャリア教育を意識した内容、特別活動以外で将来の夢や職業・生き方をテーマにする学習」について自由記述により回答を求めた。さらに、「キャリア教育推進上の課題と思われるもの」について選択肢より複数選ぶように回答を求めた。

(3) 調査結果及び考察

富山県内の小学校183校のうち101校から回答を得ることができ、回収率は55.2%であった。

ア キャリア教育に関する校内組織や計画について



図 1・2 より、7 割強の小学校には教育計画にキャリア教育が位置付けられているが、校内組織を設置している小学校は 3 割弱と少ないことが分かった。

図 3・4 より、約 6 割の小学校にキャリア教育を担当する教員が設定されており、この割合はキャリア教育計画の作成の割合とほぼ同程度となっている。

図 5 からは、キャリア教育計画を作成している学校の内、今年度既にカリキュラムマネジメントを行った学校は約半数であったことが分かる。

図 6 からは、キャリア教育で育成すべき力や態度は、約 4 割弱の小学校は特に定めていないということが分かった。

これらのことから、多くの小学校ではキャリア教育について教育計画に位置付けてはいるものの、実際に校内組織を設置し、キャリア教育全体計画を定めてカリキュラムマネジメントを行ったり、育成すべき力や態度を検討し設定したりするような、実際の運用に関しては、まだ課題が多いということが考えられる。

イ キャリア教育への理解度や意識度について

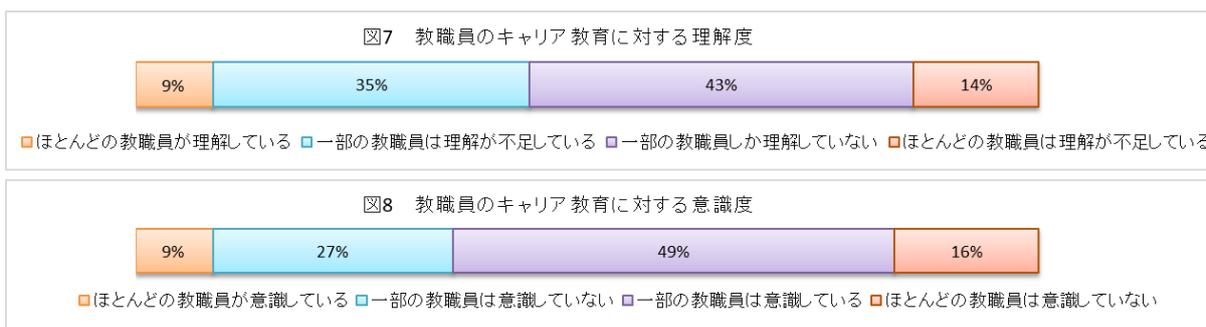


図 7 から、キャリア教育に対する教職員の理解度は、学校によって差はあるものの、全体としては半数以上の小学校が、一部の教職員のみ理解かほとんどの教職員の理解が不足しているという結果になった。

また図 8 から、キャリア教育に対する意識度については、全体としては理解度よりもさらに不足しているという結果になった。

上記の「①キャリア教育に関する校内組織や計画について」の結果と併せると、キャリア教育についての教育計画への記載は多くの小学校ではされており、一部の小学校では校内組織やキャリア教育担当者の設置等も行われているものの、教職員へのキャリア教育への理解度や意識度は学校によって差が大きく、教職員全体としては十分とは言えないのではないかと考えられる。

この背景には、日々の実践に加えて新学習指導要領の全面实施に向けての「外国語活動の広がり」や「プログラミング教育への対応」等に追われて、教職員のキャリア教育への理解や意識が高まっていないということが推察される。

ウ キャリア教育に関する校内研修について



図9より、約60%の小学校が、今年度キャリア教育に関する校内研修を実施する計画を立てていることが分かった。図10より、令和2年度から始まるキャリア・パスポートについては、約半数の小学校が準備を行っているが、まだ準備を行っていない小学校が約半数あることが分かった。

11月に「富山県キャリア教育資料『キャリア・パスポートのすすめ』」が例示されたことにより、具体的にキャリア・パスポート導入への準備が始まったのではないかと考えられる。導入の準備に当たっての取組内容を自由記述により回答を求めたところ、上記の「キャリア・パスポート例示資料の読み合わせ」の内容が多かった。また、事例集を各学年に配布したり、職員会議等で話題として挙げたりしていることも明らかとなった。また、既に「学校独自にファイルを用意して振り返りを綴る取組」をしている学校もあった。

エ キャリア教育に関する各学年での取組について

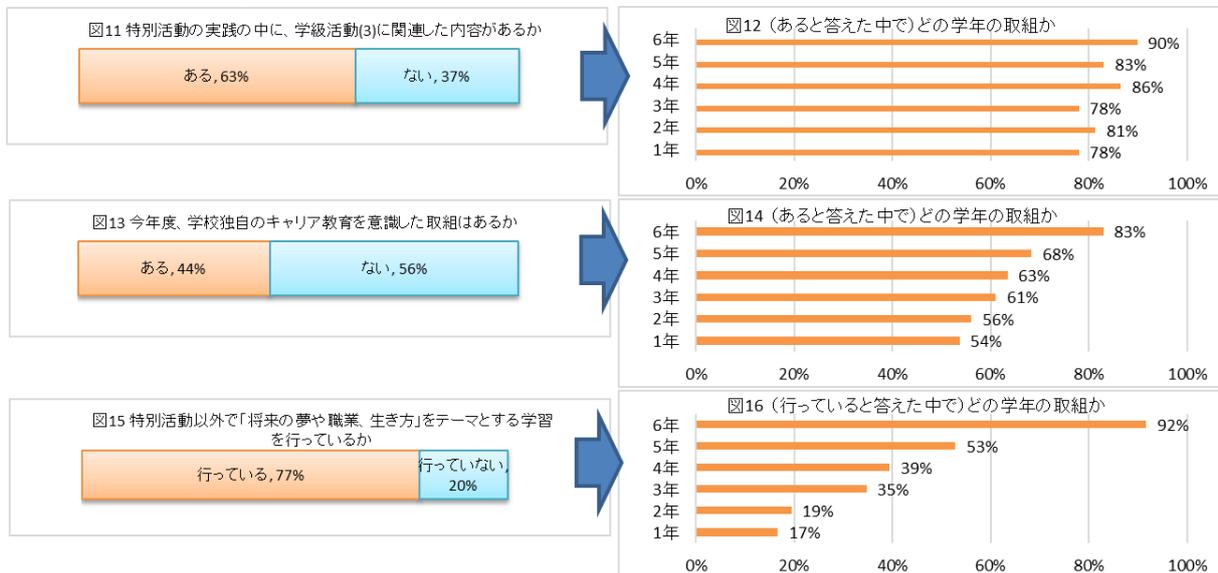


図11・12より、約60%の小学校が新小学校学習指導要領の特別活動で始まる「学級活動(3) 一人一人のキャリア形成と自己実現」に関連した内容を既に実施しているようであった。自由記述により各学年の取組を求めたところ、全ての学年段階でほぼ均等に記入され、内容としては、「学年や学期の目当て、振り返り」の内容が多く見られた。

図13・14の、学校独自のキャリア教育を意識した取組については、約45%の学校が独自の取組を行っており、学年が上がるにつれて活動内容の記述が多く見られた。中でも、異学年で交流する活動の記述が多く見られた。

図15・16より、特別活動以外での「将来の夢や職業、生き方」をテーマとする学習は約80%弱の小学校で行っていることが分かった。将来を見据えた学習や生き方につながる学習は、特別活動以外でも既に多くの小学校で行われていることが見受けられる。

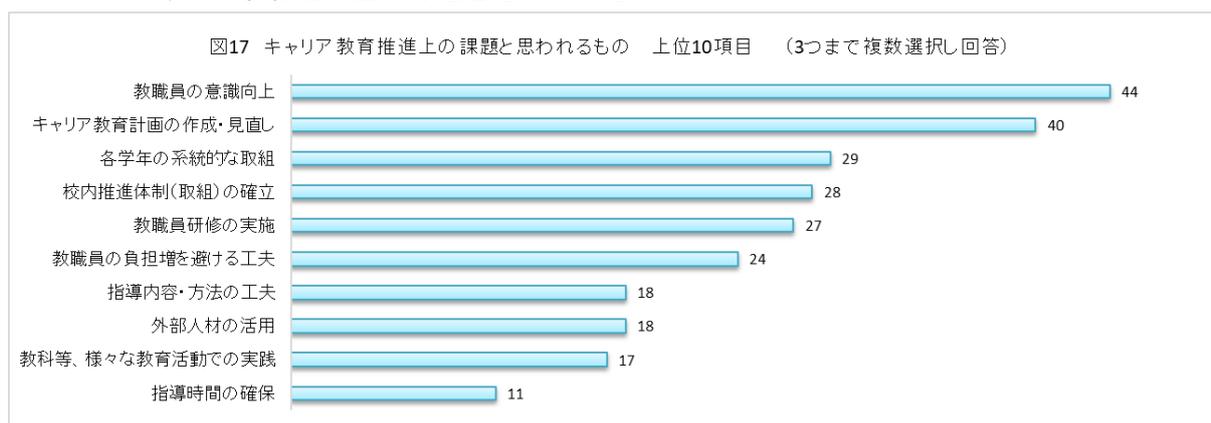
各学年の取組内容について、自由記述により回答を求めたところ、低学年では生活科で、3年生以上では総合的な学習の時間や道徳で多く行われていることが分かった。

また、図16より、学年が上がるにつれてその内容が多く、特に小学校卒業を見据えた6年生では多くの学校で「将来の夢や職業、生き方」について、特別活動以外でも学んでい

ることが分かった。この他、4年生での「二分の一成人式」の記述が多く見られた。

以上の結果より、キャリア教育に関する取組については、既に多くの小学校で行われていることが分かる。またこれらの取組は、学年が上がるにつれてより充実して行われていることが示唆された。これらの取組を、一人一人の児童のキャリア形成につなげていくための教師の関わりや、キャリア・パスポートの活用が今後求められるであろう。

オ キャリア教育推進上の課題と思われるものについて



キャリア教育推進上の課題と思われるものについて、3つまで複数選択し回答を求めた。集計後、回答の多かった上位10項目を図17に示す。

図17より、「教職員の意識向上」や「キャリア教育計画の作成・見直し」への課題意識が高いことが分かる。「キャリア教育の作成・見直し」及び「各学年の系統的な取組」、「校内推進体制(取組)の確立」、「教職員研修の実施」等については、令和2年度からの新学習指導要領の実施に向けての対応として、学校現場で早急に求められているところであろう。また、「教職員への意識向上」については、上記②の教職員のキャリア教育の理解度や意識の現状と併せて考えると、全体的な向上を図るための工夫について、今後さらに求められよう。

この他に、「教職員の負担増を避ける工夫」についても回答数が多い。様々な教育改革が実行される中で、キャリア教育へ取り組むことが教職員への過度な負担とならないように配慮が必要である。

4 富山県外における先進的取組

令和2年度からのキャリア・パスポートの実施に先駆け、様々な地域の小中学校でキャリア教育が推進されるようになった。本研究ではその中でも、地域や産業と密に連携しながらキャリア教育を進める秋田県大館市と京都府京都市の教育委員会や小学校に視察して得た知見を取り上げていく。

(1) 秋田県大館市

秋田県大館市では、ふるさとを担う“未来大館市民”を育成する「大館ふるさとキャリア教育」を軸として学校教育が行われている。以下、大館市教育委員会の意向の詳細と視察した

小学校 2 校の事例を挙げる。

ア 大館ふるさとキャリア教育

2011 年、大館市は、若者の流出と高齢者の増加が顕著な消滅可能性都市としての危機感と、大人たちの自己評価の低さを課題とし、少数精鋭の街「大館」の構築を目指す未来戦略を打ち立てた。ふるさとに生きる基盤を培う「ふるさと教育」と、その基盤の上に自らの人生の指針を描く「キャリア教育」を融合し、大館市民全員で未来を築くことに重点を置いた「ふるさとキャリア教育」を展開している。また、教育による未来創成を念頭に、ふるさとの未来を切り拓く人財育成が市全体で取り組まれている。

大館ふるさとキャリア教育のコンセプトは、「大館盆地を学舎に 市民一人一人を先生に」である。就学前教育から大学までの「縦の一貫」と、地域社会や地元企業などと「横の連携」を形成しており、ふるさとに根ざして自立する気概と能力を育成している。

イ 「おおだて型学力」の育成

大館市では、就学前の幼稚園・保育園での児童の学びと学校での学びを接続することや、小学校から中学校への学びの接続、またその後の学びの接続を意識した「おおだて型学力」の育成を目指し、教育活動が展開されている。そこには、学校だけでなく、地域社会や産業界も積極的に児童の教育に関わり、先述の大館ふるさとキャリア教育に携わる全ての大人たちで未来大館市民を育てることを重視している。



資料 1 「おおだて型学力」構想図

就学前教育から大学までに、「人間的基礎力」、「大館市民基礎力」、「大館市民実践力」を育成することを大館市の教育の中心に据えて展開されている。

ウ 総合的な学習の時間を中心とした「百花繚乱作戦」

大館市の全ての小中学校（小学校 17 校、中学校 8 校）では、ふるさとキャリア教育を学校経営の柱に据え、その中心となる活動として「百花繚乱作戦」が展開されている。

一例として、大館市立釈迦内小学校では、釈迦内サンフラワープロジェクトと題して総合的な学習の時間を中心とした活動に取り組んでいる。ひまわりを栽培し、そこからひまわり油を抽出し、その油を販売して得た収益を教育活動に生かすという地域と学校が一体となった「起業家育成教育」が行われている。

エ 「子どもハローワーク」による「働く体験」の充実

「子どもハローワーク」とは、企業・地域が行う業務やイベントの手伝い、ボランティアへの参加等、働く体験を児童に紹介し、実際に体験する活動である。大館市内の小中学生が対象となっており、体験日は土日祝日や、長期休業中である。募集方法は、企業からの依頼があった後、教育委員会が企業と打ち合わせたり募集表を作成したりし、各学校の「子どもハローワーク掲示板」やホームページで募集をかける。それを見た児童・生徒はFAXで企業に応募する。指導は、教育委員会や企業が行い、教員は携わらず、地域の教育力に委ねていた。

大館市では児童が参加した体験活動やキャリアボランティアの記録をキャリア・パスポートに記録として残すよう指導している。自分が何に興味をもって頑張ってきたか、得意なこととは何かなど、児童・生徒が自身の新たな能力や趣向に気付くことができるようにしている。

オ 未来人財育成プロジェクト

未来人財育成プロジェクトは、地域社会や産業界を代表する大人たちによる活動である。そこでは、第一に地方都市大館に欠かせない専門職の確保を目的としている。医者や薬剤師、伝統工芸の職人等、大館市の将来の人材の確保を鑑みたときに、不足すると予想される職業で働く人たちと実際に児童が触れ合うこととなっている。そして児童・生徒たちは、その仕事の実情を聞いたり、人材不足が予想される将来への危機感を目の当たりにしたりする。例えば、大学医学部と連携してフューチャー・ドクター・セミナーが行われたり、隣県大学への見学を通じた薬剤師体験等が行われたりしている。

また、未来人財育成プロジェクトには、もう一つの目的がある。それは、これからの時代に必要となる専門職の養成である。例えば、ロボット人材育成委員会や職能短大、地元企業UAV事業部と連携し、最先端技術に触れることができる環境整備がなされている。

カ 大館市の小学校における実際の取組

<大館市立A小学校の取組>

大館市立A小学校は、「学校経営の基本理念『教育は人づくり・未来づくり』のもと、全教育活動を通して、ふるさと大館への愛着心と未来を創ろうとする自立心・チャレンジ精神・実行力等を養い、ふるさと大館に根ざし、自立の気概と能力を備えた人材を育てる」ことをふるさとキャリア教育の運営方針として定めている。

A小学校は、校内指導部が4部構成であり、学習指導部、生徒指導部、保健指導部、ふるさとキャリア部となっている。とりわけ、ふるさとキャリア部はA小学校の特徴的な指導部であると推察される。

A小学校のふるさとキャリア教育のテーマは「チャレンジ・チェンジ・大館市 ～すべては、未来大館市のために～」である。そして、活動には外部機関を積極的に活用し「市民と共に学ぶ」ことを重視している。A小学校のふるさとキャリア教育は未来科と呼ばれており、学年の活動を中心とした学年未来科と、全校未来科の2つから編成されている。特

に、全校未来科では、「全校児童の夢を掲示する活動」「ふるさとドリーム集会（職業体験を通して職業観・勤労観を育成）」「ようこそ先輩（各界の職業人や職業団体に授業をしてもらう。また年一回、A小卒業生にも授業をしてもらう）」「市立病院との連携（地の利を生かして近くにある市立病院と連携し、病院のギャラリー等で児童の作品を展示したり、学校での活動を紹介したりする）」が行われている。

この他にも、子どもハローワークとの連携や、地域学校協働本部との連携（大館市人材リストを活用し、地域交流の場として開かれた学校を推進したり、地域コーディネーターと連携しながら地域人材及び地域素材の掘り起こしをしたりする）、地域行事との連携（大文字まつりやアメッコ市への参加）等の取組がなされている。

<大館市立 B 小学校の取組>

大館市立 B 小学校は、学校教育目標を「チーム B 小学校 ともに光りかがやく」とし、その経営目標を「スクール・コミュニティづくり（未来起点・元気視点の学校）～子どもたちの発想や願いを生かした地域貢献・地域創り～」と定めている。また、ふるさとキャリア教育の目指す児童像は、「ふるさとを愛し、地域のためにできることを考え、実践する子ども」である。

B 小学校は、校内指導部が 3 部構成であり、学びづくり部、心づくり部、体づくり部がある。その他に、学校プロジェクトとして「夢ふるさとキャリアプロジェクトチーム」が学校内部運営組織として位置付けられている。

B 小学校のふるさとキャリア教育のテーマは、「コミュニティ・スクールの繋がりを生かしたふるさとキャリア教育の推進」である。生活科・総合的な学習の時間を中心として、弥栄プロジェクトと題した取組が展開されている。コミュニティ・スクールとしての特徴を生かすために、地域で行われている神明社の祭典に児童一人一人が地域の人と共に関わる単元が構想されている。

以下に、令和元年度の B 小学校における各学年の単元名を示す。

- ・ 1 年生「しんめいしゃってどこにあるの？」
- ・ 2 年生「見つけたよ！しんめいしゃのすてき」
- ・ 3 年生「山車や神輿をちょうさしよう」
- ・ 4 年生「お祭りポスターを作ろう」
- ・ 5 年生「フェスティバルでお囃子と踊りを発表しよう」
- ・ 6 年生「未来に伝えよう！ぼくらのまつり」

また、学校全体の取組として、「神明社祭典のよさを発信しよう～お囃子と踊りを体験して～」がある。低学年から高学年にかけ、神明社祭典への周道的な関わりから、中心的な関わりへと発展していく単元構想となっている。

この他にも、A 小学校同様、子どもハローワークとの連携や、地域人材・地域素材の掘り起こし、地域行事と連携、ようこそ先輩等が行われている。特徴的な取組としては、「グラウンド緑化プロジェクト」、「ペットボトルキャップ回収」、「地域防災活動への参加」、「認

定こども園での読み聞かせ」等が挙げられる。

(2) 京都府京都市

ア 京都市の小学校における実際の取組

＜京都市立 C 小学校の取組＞

C 小学校校長（以下、校長）は、キャリア教育を次のように定義している。

「キャリア」とは「轍」という意味である。キャリア教育とは子供たちの学びの軌跡であり、子供たちの学びを明確にし、それらを積み重ねていくことである。

キャリア教育実現に向けて、児童が何を学び、それらをどう生かすかを明らかにするために、校長は学校教育目標を「自らすすんで学び、ともに築き、豊かに生きる C 小学校の子」と掲げた。しかし、この文では児童には伝わりづらいと考え、「人のためにする」「好きなことをする」と要約した。

日々の教育活動の中、この 2 つの目標を達成しているか、校長自ら児童に「人のために何かしていますか」「好きなことをしていますか」と声をかけるなど、児童自身に振り返りを促すようにしている。

また、児童だけでなく、教職員にもこの 2 つを達成させるため、教職員が「やってみよう！」と声を上げた時は「やってみいな！」と背中を押して実践させている。そのためか職員室から若手教諭達が教育について熱く語り合い、明るい笑い声が響くなど、教育を楽しむ雰囲気がひしひしと伝わってきた。

以下からは、C 小学校校長が考えるキャリア教育について、記していく。

【校長が考えるキャリア教育】

- ・ 普段の教科指導を極めることが実はキャリア教育を行っている
- ・ 子供たちに将来就きたい職業を決めつけさせない
- ・ 全ての学びが子供たちのキャリア教育につながっている

(ア) 普段の教科指導を極める

普段の授業や学校行事、児童の活動の中で、児童に何を学ばせたいのか、それをどう生かしてほしいのかを考えることは、とても大切である。教科の学習を教科の枠内だけで終わらせるのではなく、その学びを生活の中でどのようにアウトプットできるのかを教師が考えることで、児童は学びを積み重ねていくことができる。だから、普段の教科指導を極めることがキャリア教育であると、校長は説く。

例えば C 小学校では、学校行事で 6 年生と 3 年生が共同で宿泊学習を行っている。6 年生は 3 年生の時に同じ場所で宿泊学習を行っているため、勝手が分かり 3 年生に学んだことを教えようとする（アウトプット）。3 年生は初めての宿泊学習なので 6 年生から学ぼうとする（インプット）。こうすることで、6 年生は 3 年生に「なりたい先輩像」を示すことができ、3 年生は理想像を描きやすくなる。児童に何を学ばせたいのかを見つ

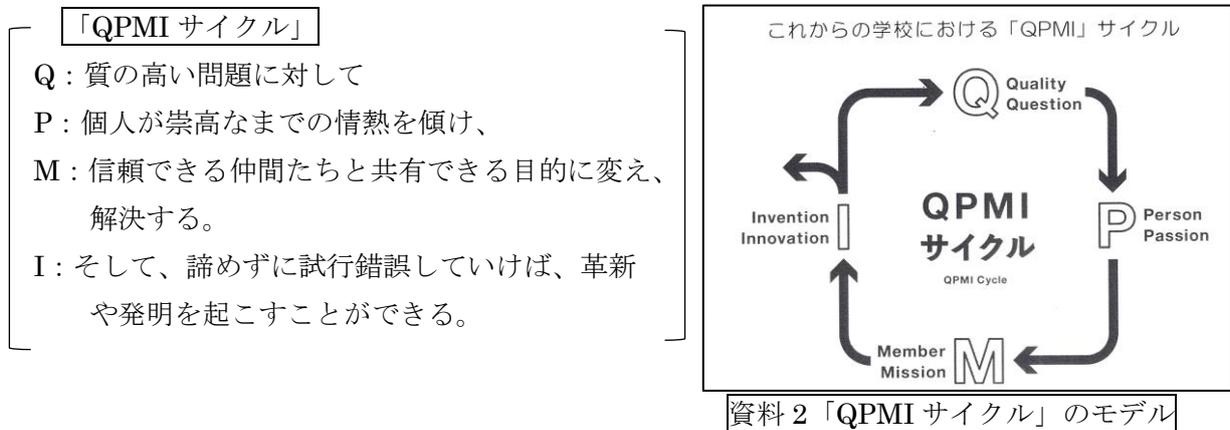
め直すだけでも、キャリア教育として成立すると校長は考えている。

(イ) 将来の職業を決めつけさせない

高学年は将来の夢を語るができるかもしれないが、下学年は困難である。だから、キャリア教育を1年生から進めるために、児童が将来の夢を語るのではなく、1年生は「どんな2年生になりたいか」と考え、それに到達するまでに何をしなければいけないのかを考えさせ、実践させることが大切であると校長は説く。職業を決めつけてしまった場合、それが叶わなかった時どうすればよいか迷ってしまう児童を生み出す危険性がある。プロ野球選手になりたいからといって、素振りだけをしていればよいわけではなく、勝つための分析や作戦を考えるなど、いろいろなことをしなければならない。そのために多くのことを考えたり、判断したり、結び付けたりする学力を身に付けることが肝心であると考えている。

(ウ) 全ての学びがキャリア教育につながっている

キャリア教育は、職業体験やキャリア・パスポート等に目が向きがちになる。しかし、キャリア教育は前述の通り、児童の学びの蓄積であるため、キャリア教育を「する」ではなく、学校生活や学習活動を通して学びを増やしたり、深めたりすることでキャリア教育に「つなげる」と捉え直す必要がある。また、児童の学びをPDCAサイクルを進めていくことは、新しいものを生み出すことができないと校長は考えている。キャリア教育を進めるためには、「QPMIサイクル」を行う必要があると強く説いた。



このサイクルで教育活動を展開することにより、児童を「アクティブ・ラーナー」に変えていくことができる。また、特別な教育や活動をする必要はなく、普段の教育活動の中で「QPMIサイクル」を行うことができるため、全ての学びがキャリア教育につながっていると校長は説いた。

(3) 先進的にキャリア教育に取り組む2つの地域を視察して

大館市、京都市の一部の小学校の事例とはいうものの、キャリア教育への意識の高さ・捉え方に差異があることを痛感する結果となった。キャリア教育を推進していくためには、児童に何を学ばせたいかを教師が真剣に考え、授業や学校生活で実践するという教育の基本に

立ち返ることが必要不可欠となる。そして、その実践が児童一人一人のキャリアビジョンを広げることにつながるということに、2つの地域の取組から気付かされる。

今回の視察ではさらに、学ぶだけでなく、その学びを実践できる機会や児童から改革できる機会を教師が設定することも、児童の学びを生かしながら、生き抜く力を育てていく上で重要だということも教えられた。

キャリア教育は「する」のではなく、全ての学びをキャリア教育に「つなげる」という発想の転換を多くの教職員に広める必要があるのではないだろうか。児童にどんな大人になってほしいのか、何を学んでほしいのかをじっくり考え合える環境づくりや教師の情熱を高めることこそ、キャリア教育の推進の基盤だと実感した視察であった。

5 富山県内の先進的なキャリア教育の取組

富山県内に目を向けてみたところ、令和2年度のキャリア・パスポートの実施に先駆け、学校全体でキャリア・パスポートはもとより、キャリア教育に先進的に取り組むD小学校がある。

本研究では、D小学校の第5学年の担任であるI教諭の実践を取り上げていく。以下は、特別活動・総合的な学習の時間の活動の振り返りに、キャリア・パスポートを連動させたことによって見えてきた児童の変容等について、I教諭自身がまとめたものである。

【実践の概要】

2学期に行われた「学習発表会」「大縄跳び大会」において活動の振り返りとしてキャリア・パスポートを活用した。キャリア・パスポートでは、活動を通して一人一人の児童に学級集団内での自分の役割を考えさせ、活動を通しての振り返り(自己評価)及び、担任や友達からのコメント(他者評価)を基に自己の成長を実感できるようにした。

(1) 振り返りとしてのキャリア・パスポートの役割

今年度、学習発表会、特別活動の実践においてキャリア・パスポートを活用した。児童に提示したキャリア・パスポートは、「富山県キャリア教育資料『キャリア・パスポートのすすめ』」(富山県教育委員会)を基に担任が学級の実態や学習活動の内容に応じて編集した

(自分の役わり)
児童が活動の中で考える自分の役わりを記述する。

5年生 学校行事や集会、係活動や当番活動
目指せ!ひみんえギネス!
比美乃江っ子なわとび大会

記入日 11月28日

自分の目当て
悔いを残さず! 全組笑顔で終わる!

自分の役わり
メンバー 失敗して終わらなくても笑顔で終わらせる役

振り返ろう

この活動で学んだことや心に残ったこと
記録も大切だけど5年2組35人全員の記おくに残すことが出来ました。

言い言葉「円を切らない」はどうだったか
大会は負けに終わったけど「円を切らないはず」5年2組に必要な言葉だと思います。

これからの学習や生活に生かしていきたいこと
この大会で体験した自分の役わり悔いを残さずに残し、目当てを生かしていきたいです。

メッセージ(友達、先生、家の人などから)

あの「準備」でがんばって頑張っていたと思はれた。 上り

がんばって糸を切っていたと思はれた! 上り

みんなも笑顔で終わらせる役、とてもすごい役割ですね。きっと相麻の人生の中で忘れられない思い出になりますよ。 井上先生より

(他者評価)
他の児童や担任からの受容的なコメントを記述する。担任によって編集追加した項目

資料3 活用したキャリア・パスポートの実際

ものを活用した。実践のリフレクションとしてキャリア・パスポートを活用する際に、2つの項目を重視した。(資料3)一つ目は、「自分の役わり」である。活動を行う際に、児童一人一人が学級における自分の役割を明確にもつことで、学級集団内での役割を果たして活動を行っていくことが、将来、他者と協力・協働して社会に参画することにつながっていくと考えたからである。

二つ目は、「他の児童や担任からのコメント(他者評価)」である。自己評価のみでなく、共に活動を行った友達や教師からの受容的な他者評価は、児童にとって自己有用感を高め、主体的に学びに向かう力を育てるとともに、自己実現へと繋がっていくと考えた。

本実践では、活動を通して変容が大きく見られた児童の様子を取り上げる。児童の抽出の観点は「集団の中で自分の役割や存在意義を自覚し、自己有用感を高めることができたかどうか」である。また、キャリア・パスポートをリフレクションとして活用したことによる児童の学級集団内での変容をQ-Uの結果も交えて捉えていく。

(2) A児(男児)の変容

ア A児の実態

年度当初、A児は自分の思いはあるが、友達になかなか理解してもらえず、意見を述べると他の児童から冷やかされるような場面が見られた。自分の思いをなかなか受け入れてもらえないため、学級活動にも消極的であり、自己肯定感も低い様子であった。また、運動に対して苦手意識があり、高学年になり野球やハンドボール等の児童クラブに所属しているグループとの間でもトラブルが起きることがあった。1学期に行われたQ-Uの結果(資料4)を見ると、「学級生活不満足群」に位置しており、学級を自分の安心できる居場所として感じられない様子であった。



イ 実践1「チャレンジプロジェクト 学習発表会『ライオン・キング』」

10月に行われた学習発表会において、5年生は体育科の表現運動と劇を織り交ぜたライオン・キングを演じた。その中で、A児はマット運動での演技を行うグループに所属し、前方転回や後方転回、側方倒立回転等の技を練習することになった。当初は、なかなか技が上達せずにいたA児であるが、練習を積み重ねる中で、側方倒立回転ができるようになり、少しずつマット運動に自信をもつようになった。

マット運動で自信をつけたA児は、劇中の役割にも挑戦したいと意欲を見せるようになった。A児が担当した役割は、ナレーション及びエンディングで登場するキリンの役である。今までのA児の実態を鑑みると、このような役割に挑戦することは少なかった。学習発表会を行う上でA児が書いたキャリア・パスポートには、「自分の役わり」として以下の内容が記述されていた。

【自分の役わり】

- ・マット運動グループで自分の技を成功させる
- ・エンディングで麒麟の役を上手に演じる

A 児は、この自分の役割を自覚し、授業や放課後にも率先して練習に参加し、本番では堂々とセリフを伝えたり、演技をしたりすることができた。学習発表会を終えての振り返りには、以下の記述が記されていた。

【A 児の振り返り】

- ・マット運動では少し失敗したけれど、一生けん命練習をした技ができてよかった
- ・ナレーションも間ちがえずに言えた。友達と協力できたので良かった

この振り返り(自己評価)から、A 児は活動を通して自分の役割に責任をもって取り組むとともに新たな自分の可能性を感じ、挑戦したことから自己肯定感が高まったと考えられる。さらに、共に活動した他の児童から A 児に対し、以下のようなコメントが送られた。

- B 児：側転をがんばっていたね。麒麟の動き上手だったよ。おつかれさま
C 児：放課後の練習もがんばっていたね

このような他の児童からの受容的なコメントは、A 児にとって友達から認められた経験として蓄積し、次の活動への意欲をもつことができたように思う。

ウ 実践2「チャレンジプロジェクト 大縄跳び大会に挑戦しよう」特別活動(4時間+課外)

2学期に校内で学級対抗の「大縄跳び大会」が開催された。担任は、この大会が児童にとって学級内で良好な人間関係を築くきっかけとなり、学級を一つにまとめる契機であると捉え、本実践を計画した。この活動において、事前に大縄跳びに関するアンケートを実施した。その中で、A 児は「大縄跳びは苦手だ」「前に引っかけたときに責められた経験がある」と回答しており、活動に対して消極的であった。

本実践において意図的に設定した活動に「合い言葉を決めること」がある。この「合い言葉」には、大縄跳び大会を通して、児童の気持ちを一つに束ね、大縄跳びという活動を通して学級が成長していくことを目的としたものである。

学級会前に、自分の意見を「話し合いカード」に書く時間を設けた。この話し合いカードに、A 児は「合い言葉の案」として以下の内容を記述していた。

合い言葉の案	その言葉を選んだ理由
円を切らない	この「円を切らない」には、2つの意味があります。一つは、大縄跳びの円(輪)を切らないということです。大縄の円を切ってしまったら記録は伸びないし、優勝もできないからです。二つ目は、5年2組の仲良しの円(心)を切らないとい

うことです。この円を切ってしまったら、5年2組ではなくて個人で戦うことになってしまうからです
--

A児は、この「円を切らない」という合い言葉の中に、大縄跳びの「円(輪)」を切らないという技能的な思いと、学級の仲間との繋がりを切らないという心情的な思いを含めていた。A児はこの意見を合い言葉の案として学級会で提案した。

以下は、A児の意見を聞いた他の児童の発言である。

B児：僕は、最初「心を一つに」という言葉が合い言葉としていいなと考えていました。でも、Aくんの意見を聞いて、この「円を切らない」という言葉も合い言葉としていいなと思いました。この言葉には、僕の思いも含まれます。だから、僕は「円を切らない」という言葉が合い言葉としていいと思います

この発表を聞いたA児は嬉しそうな表情で話し合いに参加していた。そして、学級会の終末には、多数決によって合い言葉は「円を切らない」に決定した。この学級会によりA児は、自分の思いが受け入れられたことに喜びを感じ、家庭でも自分の案が選ばれたことを誇らしげに話していた。

その後の練習会で、A児は縄を回す役割に立候補し、練習にも意欲的に参加した。また、キャリア・パスポートの「自分の役わり」の欄には「縄を回してみんなを跳ばせること」と記述し、大縄跳びという活動において自分の学級での役割を明確にもち、活動することができた。また、自分から休憩時間や放課後に練習会を企画し、縄に入れない友達を誘い、縄を回しながら縄に入るタイミングを教えるなど、他の児童のために自分ができることに取り組もうとする姿が見られるようになった。

大会では、惜しくも優勝を逃してしまったが、A児の振り返りには、以下の記述が書かれていた。

【A児の振り返り】

優勝できなくて悔しかった。でも、この悔しさはみんなも一緒だと思う。大会は今までで一番いい円だった。この5年2組のチームでこれからもいろいろなことを乗り越えていきたい
--

この振り返りに対して、他の児童からは以下のようなコメントが書かれた。

C児：リズムよく縄を回してくれてとても跳びやすかったです。これからも、このチームでいろいろなことを乗り越えていきましょう
--

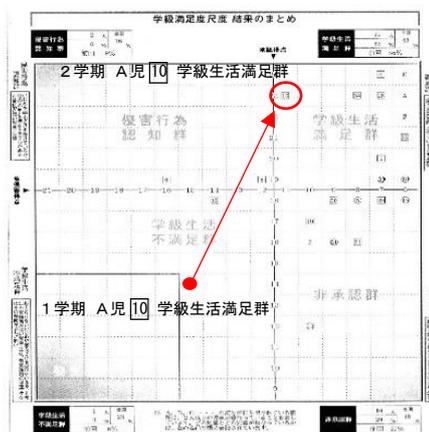
D児：僕も悔しかったです。でも、僕も今日が一番いい円だと感じました。練習会にもさそってくれてありがとう

このようにキャリア・パスポートには、A児が取り組んできたことに対する他の児童からの受容的なコメントが書かれ、これらの肯定的な他者評価が、A児自身の自己有用感の

向上に繋がったと言える。

エ 実践後の A 児の変容

2 学期に行われた Q-U の結果(資料 5)を見ると、A 児のプロットは「学級生活不満足群」から「学級生活満足群」へと大きく推移した。これは、実践を通して A 児が自分の役割を自覚し、それを達成するために行動したことによって、自分に自信をもてたことや、担任や友達からの受容的な他者評価により自己有用感が高まり、学級内に自分の居場所を見付けることができたためであると推測できる。また、キャリア・パスポートを活用し、他者評価を導入したことは、他の児童の A 児への見方にも影響を与え、学級内での対話が増えたり、受容的な雰囲気がうまれたりと、学級集団としての満足度も上昇したといえよう。



資料 5 2 学期に行われた Q-U の結果

(3) 振り返りにおいてキャリア・パスポートを活用した効果

今回の 2 つの実践において、キャリア・パスポートを振り返りとして活用することで、児童が自分の役割を意識して活動に臨むことができた。これまでも、様々な行事や学級活動では目標や目当てを考へて活動することは多くあった。しかし、児童が集団内での自分の役割を明確に捉えて責任感をもって活動に取り組むことは少なかったように感じる。児童が自分の役割を認識し、それを遂行するためにできることを考へ、行動することにより、ただ参加するだけの活動から、創意工夫を活かして自分のよさを発揮していく主体的な活動へと変えていくことができたと考へる。

また、活動後に自己評価と共に教師や友達からの他者評価を受けることにより、自分の新たな可能性に気付いたり、成長を実感したりする機会になった。前述した A 児の変容は、他者からの受容的な評価により、自分自身では見えなかった自分の価値やよさに気付く、自己有用感が高まり、学級集団の中での自分の存在意義を見出すことができたことが要因であろう。

このように、活動の振り返りにおいてキャリア・パスポートを効果的に活用したことは、個々の児童の自己有用感を高め、学級集団内での存在意義を見出せるとともに、学級集団としての高まりをうむといった大きな効果が得られた。

6 まとめ

【成果】

富山県内の小学校に、キャリア教育の推進やキャリア・パスポートへの意識等についてのアンケート調査を行ったところ、多くの学校で道徳、総合的な学習の時間を中心として、キャリア教育に関する内容を行っていることが明らかとなった。中でも、第 4 学年における「二分の

一成人式」、第6学年における「将来の夢や職業、生き方」といった学習内容は、多くの学校がキャリア教育の一環として位置付けていることが特徴的であった。

キャリア・パスポートへの意識については、令和2年度から実施されることもあってか、多くの小学校では富山県教育委員会が発行した事例集を各学年に配布したり、職員会議等で話題として挙げたりしていることも明らかとなった。しかし、具体的な取り扱い方や計画をいかにして立てるかといった一歩踏み込んだところまでは進んでいないのが多くの学校の現状である。つまり、キャリア・パスポートを次年度からいかに取り扱っていくかについては、富山県内の多くの小学校においては、まだまだ発展途上であることが推察される。

一方、秋田県大館市、京都府京都市のキャリア教育の推進事例に目を向けたところ、いずれも学校運営を行う上で、キャリア教育を大きな柱としていることが分かった。

秋田県大館市の特徴としては、地域が一丸となり、我が故郷の児童・生徒は、我が故郷の人間皆で育てるといふ、行政・学校・地域の強固な協力体制が挙げられる。その根底には、消滅の可能性があるという地域が抱える大きな問題の打破があり、キャリア教育を切実に推進している様子が窺える。また、ふるさと教育とキャリア教育を結び付けて、人材育成と共に、地域の活性化も狙う展開は、同じく地方都市である富山県の各市町村も見習うべきものがあると考えられる。

京都府京都市の特徴としては、キャリア教育自体を個別の新たな教育活動と捉えず、教師自身が日々の教科指導を極め、全教育活動を通じてキャリア教育に繋げていくという考え方を大事にしていることが挙げられる。児童が「もっと学びたい」「もっとよくなりたい」といった学びに向かう意欲を高めていく、それ自体がキャリア教育であり、そのために教師が研鑽を積み重ねていくことを重視していた。また、そういった考え方と関連していると思われるが、教師が「試したい」「児童の反応を見てみたい」といった新たな取組は、次々に推奨されるといった自由な雰囲気があったことも特徴と言えよう。日々の授業改善等については、富山県内の各小学校においても力を入れている。今後、そこからさらに一歩踏み込むとするならば、この授業を行うことでキャリア教育としてはいかなる効果があるのかといった視点を各教師がもつことが考えられよう。そういった意識改革を行っていくことで、日々の教育活動そのものが自ずとキャリア教育の推進に繋がっていくと考える。

富山県内におけるキャリア教育の先進的な取組を行っている学校の事例として、D小学校のI教諭の実践を取り上げた。D小学校は、令和元年度から前倒ししてキャリア・パスポートを学校独自の扱い方で使用している。I教諭は、富山県教育委員会から発行された事例集を、自身の特別活動や総合的な学習の時間において使いやすいように書き換えて使用している。学習発表会や大縄跳び大会といった自身が学級を育てる上で重要視する活動の振り返りのツールとして使用しているわけである。I教諭の実践においても、単なる行事後の振り返りカードという意識で使用するのではなく、教師自身がキャリア教育としての視点を明確にもって使用している点が特徴と言えよう。

県内外のキャリア教育の推進事例を見てきたところ、地域・行政・学校が今一度、児童・生徒を教育するとはいかなる意味をもつのかを考える必要性があることを痛感させられる。児童・生徒は未来を担う宝であり、目の前の教育活動を達成したか否かを評価するだけでなく、児童・

生徒個々に将来に向けてどのような能力が発現しつつあるのかといったキャリア教育を意識した広い視点をもって教育活動を行わねばならなくなったと考える。また、地域と学校の連携をさらに進め、各学校が地域住民も巻き込んで独自のキャリア教育を進めることも重要だということも分かった。児童・生徒の地域への愛着や自分の可能性への気付きへと繋げていく、そのような教育活動を展開していく必要があると考える。

また、キャリア・パスポートが完全実施されることに重点を置いて焦ってはいけないことも分かった。今までも富山県内の各小学校で力を入れてきた授業研究等に、児童の将来像も思い描いて授業計画を立てるといったキャリア教育の視点を取り入れることが何より重要であることが見えてきた。つまり、教師自身が視野を広げ、児童の未来も展望した教育活動の展開が、今後の富山県のキャリア教育の発展や、児童が未来で活躍する上での能力の発現に繋がると考える。

【課題】

本研究における富山県内の小学校へのアンケート調査は、あくまでも限定的なデータであり、今後さらに多数の小学校の現状を調査する必要がある。そうすることで、富山県内の小学校におけるさらに詳しく明確な現状が導き出されると考える。また、同様の質問項目を使用し、何年かに渡って調査を行い、その変容等についても研究としてまとめていく必要があると考える。

今回取り上げた県内外の取組についても、ごく僅かな情報であるため、さらなる県内外の小学校への視察を行い、情報を収集する必要がある。今後も、県内外の多くの優れた実践から、小学校段階におけるキャリア教育の展開について、研究を継続していく必要がある。

7 おわりに

人口減少、高齢社会、働き方の変化、貧富の拡大等、現代の日本が抱える課題を挙げれば切りがないのが実際と言えよう。しかし、そのような未来が不透明な状況であっても、児童・生徒には明るい未来、明るい日本をつくるという強い意志をもって人生を歩んでいってほしいと願う。そんな明るく活気ある未来の人材を育てるためにも、児童・生徒の将来像も見据えてキャリア教育を展開していくことは、公教育が担う重要な責務と言える。

本研究により、今後の富山県の児童・生徒のよりよい未来を作り出していくために、全教育活動の基盤として、キャリア教育の充実が鍵となることが導き出された。また、全国には既に、日常の教育活動にキャリア教育の視点を織り交ぜ、先進的に取り組んでいる地域や小学校もあることが分かった。しかし、本県のキャリア教育に関するアンケートの結果からは、キャリア教育やキャリア・パスポートに対する理解や意識はまだまだ高まっていないことが見えてきた。しかし、まだまだこれからである富山県の今の状況は、今後あらゆる展開を見せる可能性があるという意味で、とても期待できると捉えることもできる。今後、多くの小学校が、地域に根差した、地域独自のキャリア教育を展開していくことが、未来の優れた人材育成に繋がるに違いない。

この研究を進めるに当たり、公益財団法人第一銀行奨学財団より助成をいただき、先進的な実践事例を直に参観でき、充実した研究ができた。また、調査に協力いただいた大館市や京都市の教育委員会や小学校からキャリア教育を推進する考え方を学ぶこと、富山県内の小学校の関係者

の皆様からアンケートの協力よりキャリア教育の実情を知ることができた。多くの皆様の協力により充実し研究に繋がったことをここに感謝申し上げます。

今後も、未来の人材育成について多面的に捉え、考察していくためにも、県内外の多くのキャリア教育に関する実践事例を集め、研究としてまとめて発信していきたい。また、市町村によって、行政・地域、学校の連携の在り様も様々と考えられるため、富山県内の各市町村の地域性や特質に着眼し、今後の市町村による動きの違いを迫りかけていく必要もあると考える。

皆様の期待に添えるよう今後もチームで研究を継続し、キャリア教育を主軸とした実践を調査・研究を積み重ね、児童・生徒である子供たちの未来における活躍に少しでも貢献していきたい。

-
- ※ 共著者 1・・・氷見卓也（射水市立歌の森小学校 教諭）
共著者 2・・・村田夏樹（射水市立下村小学校 教諭）
共著者 3・・・宮腰真央（高岡市立木津小学校 教諭）
共著者 4・・・石垣孝太（射水市立大島小学校 教諭）
共著者 5・・・井上真孝（氷見市立比美乃江小学校 教諭）

引用・参考文献

- 1) 文部科学省（1999）中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続と改善について」
- 2) 文部科学省（2016）中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について」
- 3) 文部科学省（2019）『『キャリア・パスポート』例示資料』
- 4) 富山県教育委員会（2019）富山県キャリア教育資料「キャリア・パスポートのすすめ」
- 5) 文部科学省,国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター（2018）「キャリア・パスポートって何だろう？」、「キャリア・パスポートで小・中・高をつなぐ」、「キャリア・パスポートで日々の授業をつなぐ」、「キャリア・パスポート「児童生徒理解」につなぐ」
- 6) 丸幸弘（2014）「世界を変えるビジネスは、たった1人の『熱』から生まれる」日本実業出版
- 7) 大館市教育委員会・福祉部子ども課（2018）「おおだて型学力『人間的基礎力』育成 大館モデルリーフレット」
<http://www.city.odate.akita.jp/dcity/kyokenkyu/files/sodatitomanabi2.pdf>(最終アクセス 2020年1月25日)